

問題

インフレーションに関する次の問いに答えなさい。

- (1) フィリップス曲線について、以下の用語を用いて説明しなさい。なお、解答に当たっては、図を用いて説明すること。

用語：失業率、物価版フィリップス曲線

- (2) 下記モデルにおいて、総供給曲線及び総需要曲線が時間の経過と共にシフトし、 Y が Y_F に一致するまでのプロセスについて説明しなさい。なお、解答に当たっては、図を用いて説明すること。

$$\text{動学化された総供給曲線} \quad \pi_t = \pi_t^e + Y_t - Y_F$$

$$\text{動学化された総需要曲線} \quad \pi_t = 1 - (Y_t - Y_{t-1})$$

$$\text{インフレ期待形成} \quad \pi_t^e = \pi_{t-1}$$

$$\text{ただし, } \pi_0^e = 1, Y_{-1} = 1, Y_F > Y_{-1}$$

なお、 π ：インフレ率、 π^e ：期待インフレ率、 Y ：GDP、 Y_F ：完全雇用 GDP とし、添え字 t は時間（期初（第 0 期）は $t=0$ ）を表す。

- (3) 合理的期待形成仮説について、その前提に触れながら説明しなさい。また、当該仮説の下における財政金融政策（裁量的なケインズの経済政策）の効果についても説明しなさい。

解答のポイント

小問 3 問構成は例年通りであったが、今年は (2) の難易度が高かったことから、回避した受験生も多かったのではないかと推察される。

(1) はフィリップス曲線を説明させる問題であったが、名目賃金版フィリップス曲線と物価版フィリップス曲線について記述するか、いわゆる短期フィリップス曲線を記述するか、悩ましいところであったが、(2) や (3) とのつながりを考えると、短期フィリップス曲線に触れたほうがよいだろう（両方に言及するのは時間的にも字数的にも厳しいと思われる）。

次に (2) であるが、第 1 期に貨幣錯覚が解消され、GDP が完全雇用 GDP と一致してしまうことから、第 1 期の均衡が長期均衡と記述してしまった受験生もいたのではないかとと思われるが、第 0 期から第 1 期にかけて GDP が変化していることから、第 1 期の均衡は長期均衡ではない。

マネタリストの貨幣錯覚モデルでは、通常、長期を貨幣錯覚が解消される時期と捉えることが多いが、IAD-IAS 分析における長期とは、貨幣錯覚が解消され ($\pi_t^e = \pi_t$)、かつ GDP が一定 ($Y_{t-1} = Y_t$) となる時期として定義される。上述したように、 Y_1 は Y_0 と一致していないことから、第 1 期の均衡を長期均衡と捉えてはならないのである。この点をクリアした上で、与式を用いて、短期均衡の変遷を的確に図示できれば及第点であるが、果たしてこの作業をそつなくこなした受験生がどれほどいたであろうか。

もっとも、出題者自身が先述のことに気づいていない公算が高いと思われることから、第 1 期に貨幣錯覚が解消され、GDP が完全雇用 GDP と一致することに気づかず短期均衡の変遷を図説したとしても、全く問題ないであろう。

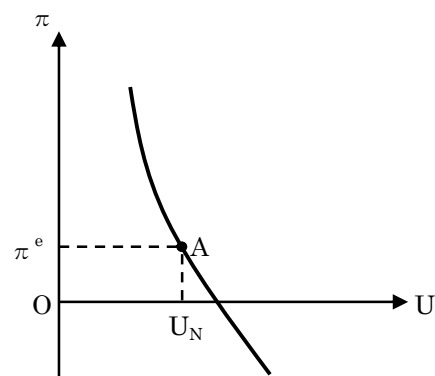
最後に、(3) は合理的期待形成仮説、およびそのもとの財政金融政策の効果を説明させる問題であるが、比較

的難易度の低い問題であり、書きやすかったのではないだろうか。

(2) を飛ばして、(1) と (3) のみを記述するというスタイルで専門記述を乗り切るという方法も考えられるが、今年の経済学は財務専門官の試験における財政学と同様、回避科目だったと言えよう。

解答例

(1) マネタリストは貨幣錯覚という概念を用いて、インフレ率と失業率の間にトレードオフの関係が成立する理由、すなわち、物価版フィリップス曲線が右下がりとなる理由を説明したが、彼らの考えに基づけば、物価版フィリップス曲線は、図 1 に示すように、完全雇用下における失業率である自然失業率 U_N と人々の予想インフレ率 π^e を示す点 A を通過する曲線として示される。これを特に短期フィリップス曲線という。



【図1】

(2) 横軸に Y 、縦軸に π をとる図 2 において、点 (Y_F, π_t^e) を通る右上がりの総供給曲線 IAS と、点 (Y_{t-1}, π_t) を通る右下がりの総需要曲線 IAD を描く。

まず、第 0 期 ($t=0$) について検討する。第 0 期において、 IAS_0 は点 $(Y_F, 1)$ を通り、 IAD_0 は点 $(1, 1)$ を通る。このとき、均衡点 E_0 において、GDP は Y_0 、インフレ率は π_0 となるが、完全雇用国民所得 Y_F は実現できていない。

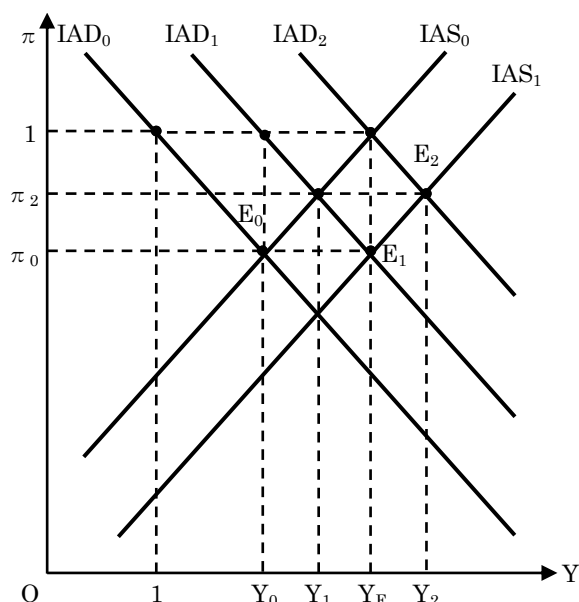
ここで、第 1 期 ($t=1$) になると、 IAS_1 は点 (Y_F, π_0) を通るように右にシフトし、 IAD_1 は点 $(Y_0, 1)$ を通るように上にシフトする。このとき、均衡点 E_1 において、GDP は Y_F 、インフレ率は π_0 となり、完全雇用国民所得 Y_F は実現できているが、第 0 期から第 1 期にかけて GDP が変化していることから、第 1 期の均衡は長期均衡ではない。

さらに、第 2 期 ($t=2$) になると、 IAS_2 は点 (Y_F, π_0) を通るように右にシフトし、 IAD_2 は点 $(Y_F, 1)$ を通るように上にシフトする。このとき、均衡点 E_2 において、GDP は Y_2 、インフレ率は π_2 となるが、ここでは完全雇用国民所得 Y_F は実現できていない。

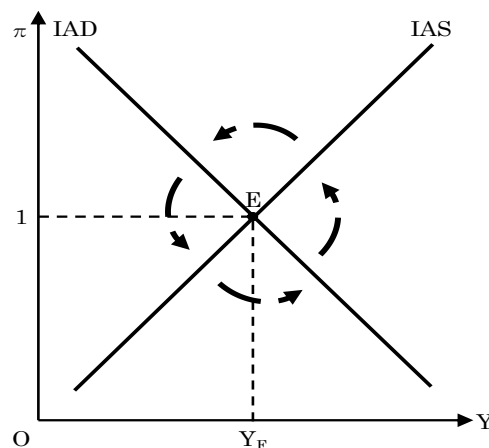
以上のプロセスが無限に繰り返される。すなわち、与件の総供給関数により、図 3 において、 $Y_t > Y_F$ であれば、 $\pi_t > \pi_{t-1}$ をみたすように総供給曲線は右にシフトし、 $Y_t < Y_F$ であれば、 $\pi_t < \pi_{t-1}$ をみたすように総供給曲線は左にシフトする。同様に、与件の総需要関数により、 $\pi_t > 1$ であれば、 $Y_t < Y_{t-1}$ をみたすように総需要曲線は下にシフトし、 $\pi_t < 1$ であれば、 $Y_t > Y_{t-1}$ をみたすように総需要曲線は上にシフトする。

結果として、長期では、 $Y=Y_F$ 、 $\pi=1$ をみたす点に収束し、長期均衡点 E が定まる。

(3) 合理的期待形成仮説とは、各経済主体は、将来の不確実な事象について、その事象の確率的な分布(平均値、分散など)を知っており、それに基づいて合理的に期待形成すると仮定した、という考



【図2】



【図3】

え方であり、R.E. ルーカス、T.J. サージェント、R.J. バローらはによって提唱された。そのため、金融政策のみならず、裁量的な財政政策の有効性に関して、一時的な財政支出か恒常的な財政支出かによって財政政策の効果が異なる可能性や、そもそも現在の財政支出は将来の増税を予測させるため、マクロ経済にとって中立的な効果しか持たず、裁量的なケインズの経済政策の効果は、短期的にも長期的にも無効とした。

以上
(1,112 字)

TAC 生はココで解けた！

専門記述対策レジュメ（経済系）問題 26（P.84）をきちんと解いていれば、小問(1)は確実に得点できたであろう。